

# KY コーパス英語母語の学習者における日本語指示詞の習得過程 —「これ」「それ」、「この」「その」各形式の使われ方を中心に—

猪股 来未

キーワード：日本語、指示詞、習得過程、英語母語学習者、KY コーパス

## 要旨

本稿は、学習者が指示詞の語彙形式をどのように体系づけて使用し、発達させているかを明らかにするため、KY コーパスの英語母語学習者が使用した指示詞の語彙形式「これ」「それ」「この」「その」について、使用パターン、および談話における機能を調査した。その結果、同じ系統(コ系、ソ系)や次元(「これ、それ」「この、その」)であっても、初めから体系的に発達させていくというより、個々の形式をそれぞれに発達させていく傾向にあることがわかった。また、それぞれの形式が決まったパターンを用いて使い始める傾向にあることから、学習者は各形式を初めから生産的に使用するのではなく、パターンと共に文脈と結び付け、機能として使用しながら発達させている可能性があり、使用依拠モデル(N. Ellis 2002、Tomasello 2003)との関連性が示唆された。

## 1. はじめに

指示詞は、コミュニケーションに必要な、共同注意を調整する機能があり (Diessel 2006)、学習者の指示詞を調査することは、学習者が目標言語を用いてどのようにコミュニケーションをとっているかを探る上でも重要である。日本語指示詞の習得研究においては、日本語文法のコ・ソ・ア 3 項の対立体系をもとに、学習者の使い分けや使用難易を調査したものが多く、これらは目標言語を規範にして学習者の使用を捉えていると言える。しかし、第二言語学習は、目標言語とも母語とも異なる自律的な言語体系(中間言語 : Selinker 1972)を作っていくとされ、習得の過程を捉えるためには、目標言語体系を規範として学習者言語をみるのではなく、学習者自身が言語体系を作っていくプロセスを明らかにする必要がある(大関 2013)。このことから、指示詞の習得研究においても、学習者自身が、どのように 3 項対立の体系を作っていくのかという観点から捉えていく必要がある。そこで、本稿は、学習者の中間言語体系における指示詞の使用を探るため、語彙形式「これ」「それ」、「この」「その」について、それぞれの学習者の使い方およびその変化の過程を調査した。

## 2. 指示詞について

### 2.1 日本語の指示詞について

本稿で対象とする日本語の指示詞は、名詞の形態だけではなく、連体詞や副詞など様々な品詞にまたがって存在しており、各形態によって指し示すものが異なる(益岡・田窪 1992)。指示詞は「指し示すもの」であり、日本語学における指示詞の研究では、主にコ・ソ・ア 3 項が指し示す領域に関する研究が多い。佐久間(1951)は、コ・ソ・アは話し手の領域、相手の領域、その他を指し示すものとし、三上(1955)は、近称・遠称としてのコ・ア、そして話し手・聞き手の領域を指すコ・ソの二つの 2 項対立であるとした。

その後、正保(1981)は、近称・遠称でも、話し手・聞き手の領域を指す場合でも、3項の使用が見られたことから、三上(1955)の枠組みを発展させ、それぞれを対立型と融合型とした。対立型は、話し手と聞き手の距離が離れている時に、話し手の領域を「コ」、聞き手の領域を「ソ」、それ以外を「ア」で表すものである。一方話し手と聞き手の距離が接近している時は融合型となり、話し手聞き手のなわばりにあるものを「コ」そして遠いものを「ア」で指し、「ア」で指すには近すぎる場合に「ソ」で指す。これらの研究では、話し手の他に、聞き手の領域が考慮され、コ・ソ・アが分類されている。

一方でコ・ソ・アの分類に、聞き手を考慮に入れない見方もある。金水・田窪(1992)は、日本語指示詞を、話し手の心的領域(「直接経験領域(話し手の過去の経験や現場の知覚)」「間接経験領域(言語的概念)」)への検索指令と捉え、形態素コ・ソ・アの機能をその検索領域の限定との見方を示した。この「間接経験領域」には、直接知り得ない情報であるとして、聞き手の知識も組み込まれている。これは、対話を情報の交換とし、話し手はあらかじめ対話に必要な知識のデータベースを作り、対話により、それを書き換え、更新していくという「談話管理理論」の立場から述べたものである(金水・田窪1992)。そして、庵(2007)は、テキストの結束性の観点から指示詞を調査し、コ・ソ・アおよびゼロは、指示表現として、心的領域の指示(眼前指示のコ・ソ・アおよび文脈指示のア)の他に、テキストレベルの指示(コ・ソ・ゼロ)においても使用されるとの見方を示した。また、「ソ」および「ゼロ」は、指示表現とは異なる、連結詞のような統語的役割を果たす、代用表現にも分類されるとの見解を示した。このように、コ・ソ・アの3項の対立体系について、それらが指し示す領域について様々な研究が行われ、議論が続けられている。

## 2.2 英語の指示詞について

本稿で対象とする学習者の母語である英語の場合、指示詞は *this/ these*、*that/ those* であり、2項対立である。そして、形態は変わらず、代名詞および限定詞として使用される。英語の *this/ these*、*that/ those* は、日本語のような話し手、聞き手の領域といった「なわばり」は意識されず、話し手から近いか遠いかのみで使用される(Greenbaum & R. Quirk 1990 池上他訳 1995)。そして、その指示詞 *this/ these*、*that/ those* の対立は、空間表現だけでなく、時間表現で、前者が現在を表す際に使用され、後者が遠い過去、遠い未来を表す際に使われる場合や、前者が前方照応、後者が後方照応で使われるなど、様々な表現の中で現れる。

## 3. 先行研究

### 3.1 コ・ソ・ア 3項の使い分け

日本語学習者を対象とした指示詞の習得研究では、主に日本語学におけるコ・ソ・アの領域に関する研究をもとに、その3項の使い分けに関する使用難易や誤用の分析を行った研究が多い(新村 1992、安 1996、2005 他)。これらの研究では、文脈指示のソ・アの使い分けに誤用が多いことが指摘されており、その背景に母語の干渉や、教室での文脈指示の明示的な指導の不足を挙げている。しかし、これらの研究は、目標言語を規範としているため、学習者がどのように3項対立の体系を作っていくかという分析はされていない。

### 3.2 学習者における指示詞の語彙の使用

新村(1992)は、コ・ソ・ア 3 項の使い分けの他に、コ・ソ・アを含む語彙の使用についても言及している。新村は、英語を母語とする中上級日本語学習者(23 人)を対象にインタビューと作文で使用された指示詞を分析した。新村は、中級レベルの学習者が使用したコ・ソ・ア語彙の種類のおよび文脈上指示詞が入るべきところに入っていない点を挙げ、学習者が使用する日本語のぎこちなさを指摘した。そして、上級の学習者では、コ・ソ・アの語彙と使用頻度の増加がみられ、不自然さが消え、なめらかになったと述べている。新村は、中級の学生におけるコ・ソ・ア語彙の種類のおよび、使用すべき箇所での非用について、指示詞の派生語彙を持たない英語を母語にもつ学習者にとって、日本語指示詞の各語彙と指示範囲を習得するのが困難であるためだと説明している。そして、日本語が上達するにつれて、使用するコ・ソ・アの語彙の種類が多様になり、日本語に結束性が生まれるとも述べている。

新村(1992)の結果から、学習者は、それぞれのコ・ソ・アの語彙の使用をレベルによって変化させていることがわかる。しかし、新村(1992)も、学習者の指示詞の使い方が日本語の枠組みに合うか合わないかを観点に調査しているため、学習者が日本語の指示詞をどのように使用し、発達させていくかを示すことはできていない。また、学習者の談話に結束性が生まれるというのも、使用する指示詞が多様になったためというよりも、学習者の日本語全体の習得が進んだことにより起こったとも考えられるが、新村(1992)はその点については言及していない。

### 3.3 迫田(1998)の研究

迫田(1998)は、「ソ・ア」の使い分けの裏に、学習者独自の文法体系が存在していると捉え、韓国語と中国語母語の学習者それぞれ 3 名に対し、3 年間の縦断的な対話調査を行い、指示詞の使用を分析した。そして、学習者の使用した指示詞の形態(「この」「これ」「こんな」など)を時期ごとに整理した結果、「これ」が使われている時期であっても、同じ形態の異なる系統の「それ」「あれ」が使われないなど、形態によってコ・ソ・アの使用に偏りがみられることが明らかになった。このことから、迫田(1998)は、指示詞の使用が見られても、学習者は 3 項対立を念頭において使用しているのではないと推測している。

さらに迫田(1998)では、学習者の使用したソ系指示詞、ア系指示詞に続く語を調査し、それをもとに会話文の中での選択テストを行い、検証を行った。その結果、「その」「そんな」には「こと・感じ」などの抽象名詞が、「あの」「あんな」には「人・先生」などの具体名詞が使用される傾向にあり、学習者におけるソ・アの選択は、後続の名詞が左右していると結論付けた。この結果は、学習者は言語処理の負荷を **chunks** で記憶することにより軽減させる傾向にある (Skehan1998) ことから説明できるだろう。ただし、迫田(1998)は、学習者がそこから先、どのように使用を変化させ、中間言語を発達させていくのかという点には言及していない。

### 3.4 英語母語話者の「こう」「そう」「ああ」の使用

猪股(2014)では、学習者の指示詞の語彙の使用過程を調査するため、英語母語学習者の OPI インタビューデータ KY コーパス(鎌田 1999)から、「こう」「そう」「ああ」を取り出し、その前後の文脈などから、学習者の使用を分析した。その結果、「そう」は「そうです」といった応答・同意などの定型表現から、「こう」は動きを説明する際のジェ

スチャーと共に使用し始める傾向にあり、このような個々の文脈と結びついた表現としての使用から、連続的に指示詞としての文法的な使用へと変化することが示唆された。そして、この結果から、学習者は初めから指示詞の対立規則を習得し、それに基づき使用しているのではなく、個々の形式をそれぞれ文脈と結び付け、表現として使用しながら、結果的に3項の対立システムを発達させていくと仮説を立てた。これは、言語習得は item-based で進み、そこから構成規則が抽出されるという、使用依拠モデル(N. Ellis 2002 他)に沿うものである。しかし、猪股(2014)で扱ったのは一つの次元の形式であり、この仮説を検討するためには、他の指示詞の語彙形式とも比較して学習者の使用を調査する必要があるだろう。

### 3.5 残された課題および本研究の目的

従来の日本語指示詞の習得研究では、目標言語の規範をもとに指示詞の使用を議論してきていた。しかし、指示詞の習得過程を解明するためには、一度目標言語の規範から離れ、学習者が個々の語彙形式をどのように使いながら、文法体系を作り上げていくのかを探る必要がある。この点を踏まえ、猪股(2014)では指示詞の語彙形式「こう」「そう」「ああ」の学習者による使用を調査し、学習者が指示詞の語彙形式を、それぞれ文脈と結び付け、表現として使用しながら、結果的に3項の対立システムを発達させていくという仮説が立てられた。しかし、猪股(2014)で扱った語彙形式は一つの次元のものであり、この仮説を検討するためにも、別の指示詞の語彙形式の使い方を見る必要があるだろう。そこで、本稿では、初級の早い段階で指導を受ける語彙形式「これ」「それ」、「この」「その」について、使用パターンを調査し、談話の中でどのような機能として使用されているか、分析を行った。

- (I) 「これ」「それ」「この+名詞句」「その+名詞句」は、どのようなパターンと共に使われているか。
- (II) 「これ」「それ」「この+名詞句」「その+名詞句」は、談話の中でどのような機能で使われているか。
- (III) 各形式の使用パターン、談話機能は、レベルにより異なるか。

## 4. 研究方法および使用データ

日本語学習者対象の OPI インタビューが文字化された「KY コーパス(鎌田 1999)」から、英語母語の学習者 30 名(初級 5 名、中級 10 名、上級 10 名、超級 5 名)を対象に分析を行った<sup>1</sup>。学習者の発話データから、「これ」「それ」、「この」「その」を抜き出し、その前後の文脈内容から使われ方を分類、傾向を分析した。分析したデータは、「これ」が 33 例、「それ」が 204 例、「この+名詞句」42 例「その+名詞句」が 342 例であった。学習者の中間言語の発達をみていくため、学習者が使用したものは、正用・誤用に関係なく調査の対象とした。

ただし、接続詞や、副詞的に使用されているもの、時を表す表現などの、定型表現と

<sup>1</sup> KY コーパス(鎌田 1999)は、平成 8~10 年度文部省科学研究費補助金による研究「第 2 言語としての日本語の習得に関する総合研究」(研究代表者:カッケンブッシュ寛子、研究課題番号:08308019)の成果の一部として収集された、日本語学習者の OPI データを文字化した言語資料である。発話者のレベルが、口頭運用能力を測定する OPI により判定されているためレベルが明確であることと、インタビュー構成の明確さ、データ間の比較のしやすさから(山内 n.d.)、本研究の対象とした。

して使用されているものは本稿では扱わない<sup>2</sup>。また、(1)や(2)のように引用節中に使用され、引用元では眼前指示であったと考えられるが、発話時には特に何かを指し示しているわけではないものも、本稿では扱わない。

- (1) S: うん実はねえわたしーなるべくあんまりだめと言わないあの一子どもと一緒に遊んで、〈ん、ええ、ええ、え、うえ〉あ一場合で、〈え〉あの一、**これ**しましょうとか、〈え、えーえ〉あの一、〈え〉**これ**はいいことですよ、〈ええ〉あの言いますよ、(上級 EAH01<sup>3</sup>)
- (2) S: キリスト教でしたらはっきりとテキストに、**これ**はいけませんあれはだめですよとか、〈うーん〉あの一、書いてありますけど、(超級 ES01)

その他、「これ」「それ」と同次元の「あれ」、および「この」「その」と同次元の「あの」も本稿の対象から外した。「あれ」は、全レベルで25例と、他の形式に比べ、最も頻度が低く、使用の傾向をみるができなかった。使用が少ないながら最も多かった使い方は、(3)のような使い方であった。(3)は、ベビーシッターのアルバイト面接を受けるというロールプレイでの発話である。Sは、「あれ」の直後に母語で「park」と発話した後、日本語で「公園」と述べている。文脈をみると、「あれ」は眼前指示で使っているのではなく、頭の中に浮かんでいるものを、まず「あれ」として述べた後、それに当てはまる語を使用していると考えられる。これは、学習者の記憶にあるものを「あれ」で指し示していると考えられるが、学習者の記憶との関係については、本稿で扱ったデータから明らかにするのは無理があることから、本稿では扱わず、今後の課題とする。

- (3) S: あはいそう、でも、、、でも、、、たぶん大丈夫でも、10時から、〈はい〉10時から7時までちょっと長いでも、もし、いい天気でしょう、一緒に、庭で、遊びます、大丈夫ですか  
T: はい、お願いします  
S: でも、**あれ**、park 公園は近くですか  
T: はい、ここから、あっ あそこに見えますね、〈ああそう〉すぐそこです(初級 ENH01)

<sup>2</sup>定型的な表現として、本研究のデータから除いたものは以下のものである。

- ①「これ」「それ」  
接続詞・接続詞的に用いているもの：それから、それで(は)、それも、それに、それにしても、それが、それとも、それか、それと  
副詞的に用いているもの：それほど、それだけ、これだけ  
時、順番、位置を指しているもの：これから、それあと\*など  
その他：これで
- ②「この」「その」直後に続く名詞句  
時、前後を表すもの：時、間、2年間、前、あと、など  
副詞的に使用しているもの：まま  
この/その/あの以外では使用しにくいもの：へん  
その他：よう(な)

<sup>3</sup>括弧内に、レベル(初級、中級、上級、超級)、及び、文字化資料の番号を示す。(1)の例は、文字化資料 EAH01 から引用したものである。Eは英語母語、Aは上級レベル(Advanced)、Hはサブレベル上(high)の意味である。レベルはその他、初級レベル N(Novice)、中級レベル I(Intermediate)、超級レベル S(Superior)で記される。サブレベルは、その他下 L(low)、中 M(mid)、で記される(山内 n.d)。本研究ではサブレベルを考慮せず、初級、中級、上級、超級の4レベルで調査を行う。

「あの」は2970例と、語彙形式の中で一番頻度が高い形式である。しかし、後続が名詞句である割合が、「この」が91%、「その」が85%であるのに対し、「あの」は47%と、品詞に関係なく「あの」を使用する傾向にあった。そして、これらはフィラーとして使用している可能性が考えられる。(4)の波線部分は、後続に名詞句が続く例であるが、名詞句が続いていてもフィラーとして使用しているのか、指示詞として使用しているのか、この文字化されたコーパスからは判断できない。そのため、本稿の対象からは外した。「この+名詞句」と「その+名詞句」としたものの中には、「この/その」と名詞句の間に「あの」が挟まれている例が数例見られたが、これらは全て「この/その+名詞句」として扱った。「あの」が様々な語や文節の間に挟み込まれており、指示詞としてというよりも、フィラーのように使用されているためである。

- (4) S: うんーそう あの、あの戦争を始まるのが、戦争を、戦争始めるのは、〈うん〉あーあの、もっと待ったほうがいいと思います、〈うん〉あのその、なんて言いますか、それ、あの、言葉、忘れちゃったですけどー、あのー、イラクに対してー、あのー、輸入して、輸入してない、しゅ、しゅつにゅう、し、輸入し、〈うん〉してないーし、〈うん〉輸入してないし輸出、輸出してない、の、あの、政策はー、あのー、もっとー時間があつたらー、ほんとに、能率的なせい、政策、政策と思いますけど、あんまり、待てなかったですから、(上級 EAH03)

## 5. 研究結果および考察

### 5.1 頻度

表1は、各形式の頻度を示したものである。「これ」「この+名詞句」は眼前指示と文脈指示の両方が使われていたが、「それ」「その+名詞句」は文脈指示でのみ使用され、眼前指示では使用されていなかった。このように、文脈指示に比べると眼前指示での使用が少ないという結果だったが、データがインタビュー形式であることから、眼前指示の使用が限られていたという可能性も考えられる。従って、本稿では、眼前指示と文脈指示とで使用の頻度を比べることはできないため、比較は行わない。また、表2は、1000形態素あたりの頻度である<sup>4</sup>。各レベルのデータ数が異なり、各データの発話量も異なるため、レベル間の比較には、1000形態素あたりの頻度を用いる。

眼前指示では、「これ」「この+名詞句」各形式共に中級から使用されていた。頻度を比較すると、各レベルとも「この+名詞句」の使用頻度が「これ」を上回っている。データの性質上、眼前指示は使われる機会が限られているが、その中では「これ」よりも「この+名詞句」が使用される傾向にあると考えられる。文脈指示では、初級で使用されているのは「これ」のみであり、他の形式が使用されるのは中級からであった。初級で使用されていた「これ」は中級では使用されず、上級で再び使用されている。中級以降、各レベルで最も使用されていた形式は「その+名詞句」で、次いで多く使用されていたのは「それ」であった。

<sup>4</sup>形態素数は、インタビュワーの相づちなどを除いた、学習者の発話部分のみを、形態素解析ソフト mecab を用いて形態素に分け、計算した。数の比較のためのみに使用するため、言いよどみなどは考慮せずそのままデータに含めた。

表1 各形式の頻度

	眼前指示		文脈指示			
	これ	この名詞句	これ	この名詞句	それ	その名詞句
初級(N=05)	0	0	2	0	0	0
中級(N=10)	5	12	0	5	19	60
上級(N=10)	1	12	10	5	79	168
超級(N=05)	4	7	11	1	106	114
全レベル(N=30)	10	31	23	11	204	342

表2 各形式の頻度(1000形態素あたり)

	眼前指示		文脈指示			
	これ	この名詞句	これ	この名詞句	それ	その名詞句
初級	0.00	0.00	0.50	0.00	0.00	0.00
中級	0.29	0.70	0.00	0.29	1.10	3.48
上級	0.03	0.41	0.34	0.17	2.67	5.68
超級	0.25	0.44	0.70	0.06	6.71	7.21
全レベル	0.15	0.47	0.35	0.17	3.06	5.13

※小数点第三位以下四捨五入

## 5.2 眼前指示の使い方

5.1 で述べたように、眼前指示は「これ」及び「この+名詞句」が使用されており、「この+名詞句」の使用が「これ」の使用を上回っていた。「これ」の眼前指示での使われ方は(5)のようなもので、全てその場にあるものを指し示す際に使われている(ロールプレイ中にその場にあると仮定したものも含む)。(5)では、Tから渡されたものを指して、「これ」が使用されている。

- (5) T: はい、じゃね、そなん、ちょっとこれを、もう一つしてみてください、読んでください  
 S: これを  
 T: はい、読んでください(上級 EA03)

モノを指し示す「これ」に対し、「この+名詞句」は広い範囲で使用されていた。表3は、「この」に続く名詞句の一覧である。「この」に続く名詞句は、モノの他、場所や、人などにも使用されている。EIL01の「バラのスカーフ」「プレゼント」、EIH03の「筋肉」などは「これ」でも述べることはできるが、多くの「この+名詞句」は、「これ」で述べることができない。また、上級では、「京都のセンター」や、「業界」「送別会」など、話し手がいる場所や所属している社会、参加している行事など、話し手が身を置いている領域に「この」が使用されている。全体レベルを通して、「この」と共に使われた名詞句をみると、「この」は話し手が属しているものか、話し手に属しているもの(「筋肉」や「足」など)に対して主に使われると考えられる。眼前指示については、「この+名詞句」は、「このバラのスカーフ」や、「このプレゼント」といった「これ」と同じような使い方も可能ではあるが、話し手が属しているものか、話し手に属しているものに「この」を使用するという「これ」とは異なる使い方に関心をもち、発達していくと考えられる。



表3 眼前指示「この」後続の名詞句(重複するものは除く)

中級		上級		超級	
EIL01	バラのスカート	EA01	京都のセンター	ES01	地球上
	プレゼント		送別会		足
EIL02	大学	EAH02	業界	ES02	金物
	大学先生		職場		国際文化
EIM04	大学院	EAH07	地方		こっちのこれ
	大学		街	世界	
EIH03	筋肉	EAH08	あたり	ES07	Tさん
	一つ				
	pushの筋肉				

### 5.3 文脈指示の使い方

#### 5.3.1 各形式の使用パターン

表4は各形式の使用パターンを見たもので、括弧内は実数を割合で示したものである。各形式で、使用開始レベルに最も使われたパターンは、「無助詞(φ)」または「は」が続くものであった。「全レベル」で「φ/は」の使用の割合をみると、「これ」が74%、「それ」が57%、「この+名詞句」が45%であるのに対し、「その+名詞句」が23%と最も低い。このことから、「その+名詞句」が他の形式と比べ、様々なパターンで使われていると考えられ、最も生産的に使用されているといえる。

「その+名詞句」と反対に「これ」は、「φ/は」を伴わせている割合が他の形式に比べて高い。「これ」で使用されているパターンは、主に「φ」、「は」または「が」であり、このパターン以外で使われたものは1例のみであった。上級以降も「これ」は、使用の9割以上が「φ/は/が」を伴わせており、レベルが上がっても「φ/は/が」のパターン以外の使用は見られなかった。このことから、「これ」は「これ φ/は/が」という形で、使用を発達させていくことが示唆される。

これに対して、「それ」は、中級レベルでは、9割が「φ/は/が」パターンであったが、上級では66%、超級では64%と、このパターンでの使用の割合が低く、「φ/は/が」以外のパターンでも使われるようになっていた。このことから、「それ」は初めのうちは「それ φ/は/が」というパターンで使用していたのが、レベルが上がるにつれて生産的な使用へと発達させていったと考えられる。また、「この+名詞句」については、「これ」と同じように使用パターンが限られていたが、この形式の頻度自体が低く、特定の傾向はみられなかった。

以上、各形式の使用パターンの調査から、各形式は、初めのうち、それぞれ決まったパターンで使われる傾向にあることがわかった。そして、そのパターンや使用変化は、形式により異なっていた。使用パターンの変化をみると、早い段階でパターンが多様化するものもあれば、固定したパターンで使われ続けるものもあり、形式によって生産的に使われる段階が異なることがわかった。



表 4 各形式の使用パタンの頻度

「これ」					
	φ	は	が	を	その他
初級(N=05)	2 (100)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
中級(N=10)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)
上級(N=10)	1 (10)	5 (50)	3 (30)	1 (10)	0 (0)
超級(N=05)	5 (45)	4 (36)	2 (18)	0 (0)	0 (0)
全レベル(N=30)	8 (35)	9 (39)	5 (22)	1 (4)	0 (0)
(%)					
「それ」					
	φ	は	が	を	その他
初級(N=05)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)
中級(N=10)	3 (16)	11 (58)	3 (16)	1 (5)	1 (5)
上級(N=10)	14 (18)	33 (42)	5 (6)	10 (13)	17 (22)
超級(N=05)	18 (17)	38 (36)	12 (11)	18 (17)	20 (19)
全レベル(N=30)	35 (17)	82 (40)	20 (10)	29 (14)	38 (19)
(%)					
「この+名詞句」					
	φ	は	が	を	その他
初級(N=05)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)
中級(N=10)	0 (0)	2 (40)	1 (20)	1 (20)	1 (20)
上級(N=10)	1 (20)	1 (20)	0 (0)	0 (0)	3 (60)
超級(N=05)	1 (100)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
全レベル(N=30)	2 (18)	3 (27)	1 (9)	1 (9)	4 (36)
(%)					
「その+名詞句」					
	φ	は	が	を	その他
初級(N=05)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)
中級(N=10)	5 (8)	25 (42)	7 (12)	10 (17)	13 (22)
上級(N=10)	7 (4)	24 (14)	29 (17)	22 (13)	86 (51)
超級(N=05)	2 (2)	15 (13)	23 (20)	9 (8)	65 (57)
全レベル(N=30)	14 (4)	64 (19)	59 (17)	41 (12)	164 (48)
(%)					

### 5.3.2 各形式で使われた文脈

#### 5.3.2.1 「これ」で使われた機能

「これ」は主に「φ/は/が」を伴うパターンで使われている。談話の中でどのような機能として使用されているかをみると、その機能は主に、「トピック指示」、「前置き、割り込み、追加」にわけられた。そしてその使い方はレベルにより異なっていた。

##### 5.3.2.1.1 トピック指示

初級では、1名の学習者が2例「これ」を使用したのみであったが、2例ともトピックを指示する際に使われていた。(6)(7)は、その2つの例であるが、どちらも無助詞で

用いられ、前に話したことを、「これ」でトピック化し、その後コメントを述べるといった使い方である。この2例は、眼前にあるものを指しておらず、前の文脈内容を指していることから、文脈指示にまとめられるものであるが、直前で話し手が提示し、その提示したものを指し示す方法は、話し手が自分の領域にあるものを示す眼前指示の流れをくんでいるものと考えられる。

(6) S: あーでは、〈うん〉日本で買う、〈はい〉あーん、さしみ、スーパーのさしみ<sup>5</sup>、  
{笑い} 〈うん〉一番安い、これ、んー、ごはく円ぐらい、でもレストラン  
で、あー分らない、おさしみ

(7) S: 自分のお金ですか

T: いえ、私が買います

S: おーおー、買います、ああ これいいです、はい、でも、日曜日は、、10時  
から7時までいいです((4)(5)共に初級 ENH01)

上級、超級になると、直前にあるものをトピック化しコメントをつけるといった使い方はされてはいなかったが、談話のトピックやそれに関連したもので、もうすでに話し手、聞き手の間で共有している情報に対して、「これ」を使用している例が、上級では10例中6例、超級では11例中3例みられた。(8)では、推進している事業自体は、発話内の文脈には出てきていないが、この談話のトピックはその事業のことである。(9)は、すでに「これ」が指し示すものが、発話文脈内に出てきている点が(8)とは異なるが、この発話(スピーチ)のトピックは「アメリカのコミュニケーションの仕方」であり、それに関連した内容が「これ」で示された箇所である。このことから、トピックと関連性の強いものに、「これ」が使われている可能性が考えられる。(9)は、文脈指示「これ」で唯一「φ/は/が」パターン以外の「を」を使用した例である。

(8) (推進している事業を指しているが、その事は発話の中にはでていない)

S: でもやっぱり、農業ばかりだと、工業が、第1号が難しいと思いますね、〈あーはーはーはー〉ですから、これが、ごみの、焼却、〈うん〉しょう、だけじゃなくて、これが、工業、その、経済の復活、〈うんうん〉の第1号だと説明すれば、〈やーあーあーあーあ〉ええ、〈ああ〉それで、うまくいくんじゃないかなーと思いますね(上級 EAH07)

(9) S: えーとりあえず、えーよく皆様が、えー聞くとありますがえーアメリカは一般的に言うとおーなんでも物事ははっきりと、えー言ってしまうと、えーいうのがえー普通であります、あの一、えー言葉の裏というのは大変少ないですし、あの一、こう、もし問題があったら、あるいは自分にはちょっと不満なことがあるれば、それを人に、言う、というのも、えー当たり前だというふうに思われます、えーとですから、皆様が、これをえー心に置いて下されば大変ありがたい、思います(上級 EAH06)

### 5.3.2.1.2 前置き・割り込み・情報の追加

「これ」は、前置きと本題、割り込みや情報の追加などの際にも使われていた。(10)(11)のように、後方照応で、本題に入る前の「前置き」として使用される例や、(12)のように、談話の中で「割り込みや情報の追加」に使用される例である。これらは上級から使用され、上級では全て「これ φ/は/が ~けれども/が」というパターンで使用されていた。

<sup>5</sup> 点線は、指示詞が受けていると思われる発話内容を指す。

- (10) S: たまにもう少し、あのまあ、これちょっとアメリカ的な考えなんですけれど<sup>6</sup>  
<うん>も、もう少し自分のことを、ちょっと考えてちょうだいと言いたく一  
なってしまう<うんはい> んですよ、はい、あのーバランスが<ふんふん、  
なるほどね> 大事だと思うんです、はい(上級 EAH06)
- (11) T: あのー、あれですかえーっと、今こう日本ーんの、あのー、こう社会見てて、  
<うん> んなんかちょっとねーこういうのはなーとか思うようななんかこう問  
題点とか、なんかそうゆうの感じられますか  
S: ええま問題点というより、日本人は、<うん> これが問題じゃないと思ったら  
僕も問題ないと思うんですけどね、<うん> でもなんか、日本人はなんか、一  
度しごー始めるとなかなか、<あ> 休暇とれないんですねー、(上級 EAH07)
- (12) S: えーわたくしは今日、えーお話しーしたいとおー思っておりますのは、えーア  
メリカーのおーコミュニケーショのしかた、えーこれは、大変えー日米関係  
においては、あのー問題の原因のひとつになってるのではないかと、いうふう  
に思っておりますが、えー皆さんがもし、あのーアメリカの、えー典型的なコ  
ミュニコミュニケーションのしかたについて、えー少しでも、ご存じであれば、  
えー大変幸いに存じますしあのー少しーでも、えー日米関係がえー強まってく  
るのではないかと、いうふうに思っております(上級 EAH06)

超級でも、「これ」は「前置き」「割り込み」「情報の追加」などで使われているが、  
上級と異なる点は、パタンの末尾が「けれども/が」以外の形でも使用されている点で  
ある。(13)は、最近起こったことを述べようとして「つい最近」と言いかけた後、「こ  
れ」を使用し、割り込む形で、法律のことなどの聞き手が知らないであろう背景知識を  
述べ情報を追加した後、再び最近起こったことを述べている。(14)でも、仕事内容につ  
いて、簡単に全体を提示した後、「これ」を使用し詳しい情報を追加させている。これ  
らは、情報の割り込みの際に「これ」を使用した例だと考えられるが、「けれども/が」  
を使用していない。

- (13) S: こういうふうに大学とかい、<い> あまあ大学大学、とか受ける人たち例えば、  
あつそれとまた大企業あまあ企業とかに、<ええ> あの、就職しようと思う人  
たち、あの、人種差別が問題になりましたんですよ、あつい最近、<はあ  
はあはあ> あのこれ法律的に、affirmative action っていう法律がありまして、  
<ええ> あのー、各学校または各企業にあの制限がありましたんははっきりとし  
た規制がなんにんか、黒人を、<うん> あの受け入れないといけないとかなん  
にんかの東洋人をつきえないといけない、<ん、うん> っていう、動きが 1960  
年台 70 年台から始まりましたんですよ、<ええ> またそれがつい最近に、あ  
今までずーっとみんなあの、口論した、あジベート、があつたんですけど、<え  
え> つい最近、あの各しゅが、それを、解放、<やめるってことですか> やえ  
え、<あー> あー解放し始めたんです(超級 ES01)
- (14) S: えっとですね、あのー、海外企画が、も、つい最近、か、あの、社長の直轄部  
門になりまして、で、その意味は、あのー、企画として、あの、2つ、主に、  
あの、仕事は分けてますが、一つが販売、態勢をつくると、で、二つ目が、あ  
の、製造と、あの、これはもちろん、あの、海外で、あの、やる、ことですか  
ら、あの、新しい市場にはいるために、あの、どのようなマーケティングをし

<sup>6</sup> 実線は、「これ」と共に前置きや情報の追加などが行われている範囲を示す。

なければなりませんか、んで、あの、もしかしたら、あの、その、販売をするときに、ま、まずは、あの、その、供給しなければならぬですねえ、その、供給の面は、あの、工場を造るとか、それで、あの、工場立地調査、あるいは、あの、流通事態調査、そのような、あの、調査、をしましてから、じっし、ま、実際に会社を作るんです(超級 ES06)

上級超級でみられた「これ $\phi$ /は/が ～(けれども/が)」というパタンの使用は、このパタンに概括的意味を持たせ使用しているという点で、「構文(construction)」(Goldberg 1995)として使用している可能性が考えられる。Goldberg は、項構造構文を分析した結果、動詞の意味とは別に、構文(construction)全体で意味を持つとの見方を示し、そのような概括的意味を持つパタンを構文と呼んでいる。本稿の上級超級でみられた「これ $\phi$ /は/が ～(けれども/が)」というパタンの使用も、パタンに概括的意味を持たせ使用しているという点で、「構文(construction)」として使用されているといえる。母語習得においても、初期の段階では表現全体を、具体的な使用場面とともにゲシュタルト的に学ぶと言われており(Tomasello 2003)、「これ $\phi$ /は/が ～(けれども/が)」パタンでの使用も、その過程にあると考えられる。このパタンで、前置きや割り込み、情報の追加などの談話構成に関わる機能として使用することは、より抽象化された構文(construction)を習得していく過程の一つであり、それに伴い「これ」の語彙的な概念もより抽象化していくと考えられる。

### 5.3.2.1.3 「これ」の使用傾向

表5は、「これ」の使用法別の頻度を示したものである(括弧内はその割合)。これを見ると、トピックなどを指示する際の使用から、レベルが上がるごとに前置きや、割り込み、情報の追加の際に使う割合が高くなっており、使い方に変化が見られた。以上の事から、学習者は「これ」を談話のトピックやそれに関連した情報を指し示す際に使用し、レベルがあがると、「これ $\phi$ /は/が ～(けれども/が)」という構文(construction)で、「前置き」や「情報の割り込み・追加」などの機能を持たせて使用しながら、更に「これ」の使用を発達させていくと考えられる。

表5 「これ」の使い方

	トピック指示	前置き・割り込み ・情報の追加	その他
初級(N=05)	2 (100)	0 (0)	0 (0)
中級(N=10)	0 (-)	0 (-)	0 (-)
上級(N=10)	6 (60)	4 (40)	0 (0)
超級(N=05)	3 (27)	7 (64)	1 (9)
全レベル(N=30)	11 (48)	11 (48)	1 (4)

(%)

### 5.3.2.2 「それ」で使われた機能

「それ」は、聞き手であるインタビュワー(以下 T)の発話を受ける際と、話し手である学習者自身(以下 S)の発話を受ける際に使用されている。各レベルとも T の発話を受けた使用よりも、S の文脈を受けた使用が上回っているが(表6、表7)、その使用の差はレベルとともに広がりを見せている。このことから、「それ」は相手の発話内容よりも

話し手の発話内容を受けて使用され、それが発達しているという可能性が考えられる。

表6 「それ」が受けた文脈

	T文脈	S文脈
初級(N=05)	0	0
中級(N=10)	9	10
上級(N=10)	12	67
超級(N=05)	16	90

表7 「それ」が受けた文脈  
(1000形態素あたり)

	T文脈	S文脈
初級	0	0
中級	0.52	0.58
上級	0.41	2.26
超級	1.01	5.69

※小数点第三位以下四捨五入

S文脈を受けた使用には、主に具体的なものを受けたもの(15)、抽象的な概念(16)や、動作などを受けたもの(17)、そして(18)のように、句を超えた長い文脈全体を受けたものにまとめられた。特に、この(18)のような使用は、中級で10人中2人、上級で10人中7人、超級で5人中5人と、レベルが高くなるとともに使われ始める傾向にある。このことから、初めは前の文脈にあるものを指示するだけに「それ」が使用されていたのが、前の文脈を括約し、話を進めていく機能としても使用され、「それ」の使用が発達していると考えられる。

- (15) S: そうです、いや、あの—一応家にね、〈ええ〉あのなんですかあの—自転車あ  
 {笑い} あの、〈あ—あ—あ—〉 {笑い} 置いてあるんですけども、〈ええ〉  
 うん、滅多に乗らないんですね {笑い}
- T: お—お—、飾りですか
- S: 飾りです、〈お—お—お—〉 そうそうそうもう寝室の、あるところに、{笑い}  
 置いてて、〈{笑い} あそうですかへ—〉 そうです、もうあの今、えきのう着て  
 た服が、〈え—え—〉 **それ**に、掛かっているんですよ {笑い} (超級 ES07)
- (16) S: まあ、ちょっとまあ日本の文化のことを、〈ん—〉 もう少し知ってきたと、思  
 いますし、〈ん—〉 あの—、まあえ—日本の—まあ心といますかね、〈あ—〉  
 え **それ**についても、え—少しまわかってきたような気がするんですけども、  
 (上級 EAH06)
- (17) S: あ—っと、あの野菜と肉 〈ん—ん—〉 とそば、〈ん—ん—〉 を、パンに、いれ、  
 入れる、〈うんうん〉 はいると、焼い、焼く、〈は—は—は—は—〉 **それ**、15  
 分ぐらいね(中級 EIL05)
- (18) (日本とアメリカの教育の違いについて聞かれて)
- S: 小学校、すいません、〈はい、はい〉 小学校ですね、〈うん〉 ずっと、ここまで、  
 〈うん〉 あの、難しいですね、〈うん〉 試験、試験、試験、〈うん、うん〉 厳し  
 い、〈ええ〉 とても大変だ 〈ええ〉 と思います、だから、高校の後で、〈ええ〉  
 本当に、あのやすみですね、〈{笑い} ええ〉 大学は、やさしいですね、〈ええ〉

けど、あの、アメリカはずっと、あの高校は、あのもつと、あの日本の、高校  
 〈ええ〉より、もつとやさしい、けど、〈ええ〉大学もつと大変、〈ええ〉でも  
 もつとおもしろいも、〈ええ〉ね、だから、本当に、\*\*\*で、ほんとうに日  
 本は、んーすみません、あとで仕事ね、〈はい〉けど、あの、アメリカは、こ  
 う、〈あーあーそうですか〉うん、それは、一番違います、〈あーそうですか〉  
 うん(中級 EIH03)

また、「これ」において、超級レベルなど、高いレベルで使われ始めていた「 $\phi$ /は/  
 が〜けれども/が」というパターンは、「それ」でも(19)(20)のように上級で4例、超級で5  
 例あったものの、「これ」の時と比べると割合は低い(「 $\phi$ 」「は」「が」の使用のうち、  
 上級、超級とも7%)。このことから、「それ」でもこのパターンを使用することは可能で  
 あるが、学習者は「これ」を使用する傾向にあると考えられる。また「それ $\phi$ /は/が〜  
 けれども/が」の中には、(21)のように、情報の追加というよりも、「それ」を前の文脈  
 を括約する機能として使っていると考えられるものもある。このことから、このパタン  
 を「構文(construction)」(Goldberg 1995)として概括的な意味を持たせ使用しているの  
 ではなく、「それ」を前の文脈を括約させ話を進める機能として使用し、そこに「〜けれど  
 も/が」が伴われることもあると考えられる。

(19) S: あのー日本ではまあ、えー、こう 浮気が大変多いと、〈{笑い}〉えーいう話  
 を〈んー〉あのー何回も聞いてるんですけども〈んーんー〉それはあのーま  
 あ男性が例えば結婚してても、〈んー〉あのー、ちょっと違うあの女性と遊び  
 ますよね、〈んーんーんー〉あのーその男性も、悪いと思いますし、〈んー〉そ  
 れにまあもしその女性をだましてれば、〈んー〉あのー奥さんなんかいないん  
 ですよと〈んーんー〉言って、それは別なんですけれども、〈んー〉たまに、  
 奥さんとか彼女がいてもいいからって、その女性のほうも、〈んー〉あのー許  
 すんですよ、〈んーんー〉だから、同罪だと思うんですよ 〈んーんー〉ねそ  
 の、男性も女性も(上級 EAH06)

(20) S: まあそれは、いや、どの街でも、〈ええ〉あの危険はあると思いますんで、〈う  
 んー〉それでもう、そういう田舎でも、危険なところは危険で、ただ自分、自  
 分の、身の回りを、ちゃんと、こい見ていて、〈ええ〉ほんで、気をつけてい  
 ったら例えば、あー暗い、暗いところとかーあんまり避けるように、〈ええ〉  
 あと夜ひとり歩かないっていう、ふうに一え自分で気をつけていると、〈え  
 え〉あの大丈夫、ねー、〈あっそうですか〉まあそれはどこでもそうだと思います  
 けど京都でも、〈そうですね〉みんな安全安全とか言いますけどー、まあ、  
 いつ、〈んー〉なにが起きるかわからないーし、まあいちわ、いつでも自分で  
 気をつけてみますと、〈うーん〉大丈夫だと思います(超級 ES02)

(21) T: じゃあ、彼女のどういうところがいいなあとと思ったんですか

S: そうですね、〈うん〉あの、深くても、〈うん〉深くなくても、〈うん〉あの、い  
 ろんな事について、〈うん〉話すことがあのよくできますので、一緒に、〈うん〉  
その、すごく仲が良くて、あの、両方の、そのむこう、わかると思いますので、  
 〈ふーん〉それがいい点だと思いますけど(上級 EA01)

### 5.3.2.3 「この+名詞句」で使用された機能

「この+名詞句」を前後の文脈内容から見ると、(22)(23)のように、物語や仕事  
 の内容について、順を追って述べる際に使われるもの、(24)(25)のような、聞き手と話

し手の間で共有している情報に使われるものに大きくまとめられた。「これ」と異なるところは、前に提示してあるか、聞き手と共有しているものであれば、談話のトピックだけでなく細かく様々な箇所を使うことができる点である。

(22) S: あのね、あのこの、あの、そのギャングスターは、あの、ほかの人、殺された、から、〈ん〉あの、ギャングスター、弁護士に〈ん〉あの、死んだ、死んだ人の、〈ん〉体の、〈ん〉あの、どこに、あの一、持ってきたところ〈ん〉教えた、〈ん〉教えました、〈うん〉あの、弁護士は、〈ん〉弁護士はあの一、自殺、したまえに、〈ん〉あの一ひとりの、あの一こどもに、〈ん〉あの一、この話をしました、〈ん〉あとは、あのギャングスターは、〈ん〉この子に、〈ん〉あの一、お一、おしました、お、あの一、捜したいんです、から、〈ん〉あのそういう、そういう話でした(中級 EIM07)

(23) S: わたしがーその、時計の使い方の本、を日本語からもう英語に訳してー、そしてーもう毎日アメリカ、(お一)ファックス送ってーなから、このファックスも日本語、かからもう英語に訳して、まその逆も、英語からも日本語に訳、しました(上級 EAH08)

(24) (アルバイトの面接を受ける場面で S が店側に質問をするというロールプレイで)  
T: はいはいはい、〈{笑い}〉だから、〈{咳払い}〉ん今、あの一、イ、インタビュー、〈ああはい、あーん〉はいじゃ始めましょう  
S: そう、〈はい〉ん、〈ええ〉そう、んー、えーこのアルバイトはー、〈ええ〉お一、まいん、えー毎日ーあー行かなければなりません(中級 EIL04)

(25) (S に話が来ていた仕事の担当を、S の代わりに友人を推薦するというロールプレイ)  
S: あっ、失礼します、〈はい〉お忙しいところすいませんがー、あの一、この例一、件のことなんですけどやっぱりわたしが、ちょっと、んなんかちょっと都合がわる、くてー、〈ええ〉もう、あんまりできない、かもしれません(上級 EAH08)

また、「これ」で使われていた「 $\phi$ /は/が~けれども」パターン (5.3.2.1.2)は、「この+名詞句」では (26)の 1 例だけであった。この例から「この+名詞句」であっても、このパターンで「話の前置き」で使用することは可能であると考えられる。しかし、「これ」のように構文(construction) (Goldberg 1995)として発達しておらず、「これ」と「この+名詞句」では異なる体系が作られていることが示唆された。

(26) S: 私はですね、あの一実は、あの、この話まだしてないと思いますが、〈ええ〉あの一、むこうでまだ彼女がいますので(超級 ES06)

#### 5.3.2.4 「その+名詞句」で使用された機能

中級から使われ始めた「その+名詞句」は、他の形式に比べ、中級、上級、超級全てのレベルで頻度が高い。表 8 は、各レベルで、「その」の後に使われた名詞句を、使用頻度の高い順に第 3 位まで示したものである。そして表 9 は、各レベルで「その」の後続に使用された名詞句を、使用人数の多い順に示したものである。表 10 の「この」で使われた名詞句と比べると、「その」は、中級で「人」「こと」「ところ」と共に使う頻度、人数が高く、決まった使い方がされていることが明らかになった。



表8 「その」後続の名詞句(頻度)

中級		上級		超級	
名詞句	頻度	名詞句	頻度	名詞句	頻度
人	9	人(達)	8	意味	4
こと	6	団体	7	友達/国	3
ところ	5	先生/犯罪人	4	相手/アメリカ/紙/こと/仕事/冗談/場/法律/文字/問題/ライターさん	2

表9 「その」後続の名詞句(使用者数)

中級		上級		超級	
名詞句	人数	名詞句	人数	名詞句	人数
人	5	人	3	問題/仕事/冗談	2
こと/ところ	3	先生/団体/ほう/ため/友達/お金	2	-	-
会社	2	-	-	-	-

表10 「この」後続の名詞句

中級		上級		超級	
EIL04	アルバイト	EA01	日本の方	ES06	話
EIM07	亡くなった弁護士さん	EAH08	資格		
	話		ファックス		
	友達		例の件の事		
	子		例の事		

中級で「その+名詞句」が使われた例をみると、(27)のように、前文脈を受けて使用する例もあるが、(28)(29)(30)のように、前文脈を受けて使用していない例もあった。(28)では、「自転車に乗っていくのは遠くない」というような内容を発話しようとしているが、「乗る」「行く」などの適当な語が出てこず、代わりに「そのこと」と述べている。インタビューをしている場所に来るまでの時間が話題であり、かつ「自転車」という言葉が前の文脈で使用されているため、「乗る」「行く」という意味は喚起されており、それを指したものと考えられる。また、(29)は映画の登場人物のことを指して「その人」と使用している。前の文脈では、「人を殺す映画を見た」という映画の説明をしているが、その登場人物に関する話は出てきていない。しかし、「人を殺す」という話から、「人を殺した人物」が登場することが想定できる。(30)も前文脈に「そのところ」に関する場所についての発話はなく、「よくわからないどこか」に「そのところ」が使われている。このような使用から考えると、中級では、「その」を「人」や「ところ」「こと」という語彙と共に使用し、前の文脈を指すものの他に、言語化されていないが、前文脈と関連して想起されるものを指し示していると考えられる。そして、後ろに続く名詞句は、「誰か」であれば「人」、「どこか」であれば「ところ」、「できごとや動作」であれば「こと」を使用すると考えられる。

- (27) S: えーそうですねーあの、岡山駅の、前の、あのマクドナルド、あの知ってますか  
T: はい、知っています  
S: えーあのー、そのところに、会いましょうか(中級 EIM07)
- (28) S: んー、えっとねえ、んー、10分ぐらい、〈んーん〉10分ぐらい  
T: ああ近いですねえ  
S: えー自転車で一ああー、そのことは、〈うん〉あ、んー、〈んー〉んー遠い、じゃなくて、〈うん〉でも、〈うん〉んー、あー歩くで、〈うん〉歩くで一ああー、〈うん〉ほん、あー、んーほんとに、トゥ、遠いです(中級 EIL04)
- (29) T: どんなふうに、あんどどうしてセブンという、あータイトルですか  
S: あの、その人は一あのシンケンに、の問題が、あります (中級 EIM04)
- (30) T: 家の中はどうなっていますか、家の中は  
S: ああ、どんなもの、〈ええ〉どんなもの  
T: ええ、汚れているとか  
S: あの、、あの、あたしの、わたくしの、お金と、パスポートと、あの、あの、財布、〈ええ〉のようなものありましたけど、〈ええ、ええ〉あの、ちょっと心配してますけど、〈ええ、ええ〉多分泥棒はまだそのところいますね、〈あーは一は一〉そしたらあの、でかた、でかけた方がいいですか  
T: ちょ、ちょっとごめんなさい、何  
S: 今あの泥棒は多分にいますから、でかけた方がいいですか  
T: そこにいるんですか、泥棒が  
S: そのところは、分からないんですけど、〈あーは一は一は一〉あのちょっと心配しています(中級 EIM05)

迫田(1998)で抽象名詞が続く傾向にあるという結果が示されていた、ソ系指示詞において、本稿でも特に中級では「ところ」や「こと」などの抽象名詞が続く傾向にあった。しかし、本稿では「あの」とは比較しておらず、また、「この」と「その」では使用頻度が異なるため、比較することはできない。中級の「その」の使用を見てみると、後続が抽象名詞であるから「その」を使用しているというよりも、「こと」「ところ」などの形式名詞や「人」などの名詞と共に、前文脈から喚起される、言語化していないものや、言い表すことのできない名詞句を指すという機能として「その」が使われ始めていると考えられる。このような使い方は、「この+名詞句」では見られない。このことから、学習者は、「この+名詞句」および「その+名詞句」をそれぞれ異なる文脈と結び付けて使用し、それぞれを発達させている可能性が示唆される。

## 6. まとめおよび今後の課題

本稿は、学習者が個々の語彙形式をどのように使いながら、文法体系を作り上げていくのかを探るため、多くの学習者が初級の早い段階で指導をうける「これ」「それ」「この+名詞句」「その+名詞句」について、使用パターンおよび談話機能を調査分析した。その結果、各語彙形式は、決まったパターンと共に使われ始め、その使用を変化させる傾向にあることがわかった。また、表 11 は、文脈指示での使用をまとめたものであるが、同じ次元、同じ系統の語彙形式であっても、それぞれの使い方は初めから異なり、早い段階で使用パターンが多様化する形式もあれば、固定したパターンと共に使われ続けるものもあるなど、形式によって生産的に使われる段階も異なっていた。中でも、「これ」に

において、「これφ/は/が～けれども」というパターンで、談話の構成に関わる機能を担わせて使用し発達させていく過程は、学習者が、構文(construction)(Goldberg 1995)として全体的にある機能を担わせて使用している可能性が考えられる。

表 11 文脈指示「これ」「それ」「この+名詞句」「その+名詞句」の使い方

	使用したレベル	前レベルからの増減	使用パターン			各レベルの使い方	全体の使い方	
			φ/は/が	その他	特徴			
これ	初級	○	/	100%	0%	「φ/は/が」のみ	トピック指示(前に提示したものをトピック化し、コメントをつける際に使用)	「これφ/は/が～」でトピックなどの指示、そして「これφ/は/が～けれども」で「前置き」「割り込み」「情報の追加」の使用
	中級	×	-	-	-	/	/	
	上級	○	+	90%	10%	「φ/は/が」>その他	談話のトピックを指し示す>「前置き」「割り込み」「情報の追加」に使用	
	超級	○	+	100%	0%	「φ/は/が」のみ	談話のトピックを指し示す<「前置き」「割り込み」「情報の追加」に使用	
それ	初級	×	/	-	-	/	/	「それφ/は/が～」から始まり、句から、句を超えた長い文脈への使用
	中級	○	/	89%	11%	「φ/は/が」>その他	10人中2人:句を超えた長い文脈への使用	
	上級	○	+	66%	34%	「φ/は/が」>その他	10人中7人:句を超えた長い文脈への使用	
	超級	○	+	64%	36%	「φ/は/が」>その他	5人中5人:句を超えた長い文脈への使用	
この+名詞句	初級	×	/	-	-	/	/	使い方に傾向は見られず。
	中級	○	/	60%	40%	「φ/は/が」>その他	すでに提示されているか、聞き手と共有しているものに使用(談話のトピックではなくても使用可能)	
	上級	○	-	40%	60%	「φ/は/が」<その他		
	超級	○	-	100%	0%	「φ/は/が」のみ		
その+名詞句	初級	×	/	-	-	/	/	初めは形式名詞や、「人」などの名詞と共にわからない言葉の代わりに使用。最も使用頻度が高く、早くから様々なパターンで使用され、生産性が高い
	中級	○	/	62%	38%	「φ/は/が」>その他	人や、ところ・ことなどと共に使用	
	上級	○	+	36%	64%	「φ/は/が」<その他	様々な名詞句と共に使用	
	超級	○	+	35%	65%	「φ/は/が」<その他	様々な名詞句と共に使用	

以上の事から、学習者は個々の指示詞の語彙形式をそれぞれパターンと共に、それぞれ異なる機能で使用し、使用を変化させる傾向にあることが明らかになった。これは個々の形式をそれぞれ文脈と結び付け、表現として使用しながら、結果的に3項の対立システムを発達させていくという猪股(2014)の結果に共通するものがあると考えられる。そして、学習者は初めのうち言語を使用場面と結びつけ、ゲシュタルト的に捉えながら発達させていくという使用依拠モデルにおける言語習得の流れ(Tomasello 2003)に沿うものであろう。このことから、学習者における指示詞の習得は、学習者が初めから目標言語を規範にした指示体系を作り、各語彙形式を使っているのではなく、パターンと共に個々の語彙形式を文脈と結び付け、機能として使用する中で、それぞれの形式を体系づけ、発達させている可能性が示唆された。

本稿は、インタビューデータということから、得られた使用例が限られたものであつ

た。統計的に分析するためにも、より多くのデータを収集する必要がある。また、本稿では学習者の「これ」「それ」「この名詞句」「その名詞句」の使い方の傾向をまとめた  
が、これが学習者特有のものであるかを探るためには、母語話者のデータとも比較する  
必要があるだろう。これらを今後の課題とし、学習者の指示詞の使用を明らかにしてい  
きたい。

## 参考文献

- 安龍洙 (1996) 「韓国人学習者の指示詞「コ、ソ、ア」の習得における母語の影響につ  
いて - 非現場指示の場合 -」『東北大学文学部日本語学科論集』6, pp.1-13.
- 安龍洙 (2005) 「日本語学習者の非現場指示コソアの習得に関する研究」『茨城大学留  
生センター紀要』3, pp.35-51.
- 庵功雄 (2007) 『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版.
- 猪股来未 (2014) 「学習者における日本語指示詞の習得過程—こう・そう・ああの使用  
から—」『言語科学会第16回年次国際大会予稿集』pp.71-74.
- 大関浩美(2013) 「わたしたちは新しい文法をどう学ぶのか—第二言語習得研究からわか  
ってきたこと—」『日本語文法』13巻2号, pp.3-18.
- 鎌田修 (1999) 「KY コーパスと第二言語としての日本語の習得研究」平成 8-10 年度文  
部省科学研究費補助金基盤研究(A)(1). 『第二言語としての日本語の習得に関す  
る総合研究』研究成果報告書, pp.335-350.
- 金水敏・田窪行則 (1992) 「日本語指示詞研究史から/へ」金水敏・田窪行則編『日本語  
研究資料集指示詞』pp.151-192, ひつじ書房.
- 佐久間鼎 (1951) 『現代日本語の表現と語法』(増補版)くろしお出版.
- 迫田久美子 (1998) 『中間言語研究：日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得』溪  
水社.
- 正保勇 (1981) 『「コソア」の体系』『日本語の指示詞』pp.52-122, 国立国語研究所.
- 新村朋美 (1992) 「指示詞の習得-日英語の指示詞習得の対照研究」『早稲田大学日本語教  
育センター紀要』4, pp.36-59.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版
- 三上章 (1955) 『現代語法新説』くろしお出版.
- 三上章 (1970) 「コソアド抄」『文法小論集』くろしお出版. (金水敏・田窪行則編(1992)  
に再録(pp.35 - 37)).
- 山内博之 (n.d) 「OPI を利用した KY コーパス」日本語 OPI 研究会  
<[http://www.opi.jp/shiryu/ky\\_corp.html](http://www.opi.jp/shiryu/ky_corp.html)>(参照: 2015-01-09).
- Diessel, H. (2006). Demonstratives, joint attention, and the emergence of grammar. *Cognitive Linguistics*, 4(17), pp.463-489.
- Ellis, N. (2002). Frequency effects in language processing: a review with implications for theories of implicit and explicit language acquisition. *Studies in Second Language Acquisition* 24, pp.143-188.
- Goldberg, A. (1995). *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. IL: University of Chicago Press.
- Greenbaum, S. and Quirk, R. (1990). *A student's grammar of the English language*. Essex: Longman. (池上嘉彦他[訳]1995 『現代英語文法<大学編> 新版』紀ノ国屋書店).
- Selinker, L. (1972). Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics* 10, pp.209-230.
- Skehan, P. (1998). *A Cognitive Approach to Language Learning*. Oxford: Oxford University Press.

Tomasello, M. (2003). *Construction of a language: A usage-based theory of language acquisition*. MA: Harvard University Press. (辻幸夫・野村益寛[訳]2008『ことばをつくる - 言語習得の認知言語学的アプローチ』慶応義塾出版会).

## 付記

本稿は、2014年3月に麗澤大学言語教育研究科に提出した修士論文『日本語学習者の談話における指示詞の使用についての分析』の一部および、第25回第二言語習得研究会(2014年12月14日於筑波大学)においてのポスター発表「学習者における日本語指示詞の習得過程—「これ」「それ」「あれ」の使用から—」をもとに、加筆、修正したものである。本稿の執筆にあたり、指導教員である大関浩美先生、杉浦滋子先生から数多くの貴重なご助言とご指導をいただいた。また、第二言語習得研究会の発表でも数多くの先生方からご意見、ご助言を賜った。この場を借りて、感謝申し上げたい。